

## 地図で読む野坂昭如「火垂るの墓」

——コンテンツと地域表象——

### はじめに

「火垂るの墓」は『オール讀物』一九六七年一〇月号に掲載され、翌年短編集『アメリカひじき 火垂るの墓』（文藝春秋社、一九六八年）に収められ、同じ表題と収録作品のまま、一九七二年、新潮文庫版が刊行された。

よく知られているように、作者野坂昭如はその旺盛な文学活動の一つの中心として「焼跡」という自らの出自と戦後日本を問う作品を繰り返し発表してきた。本作品はその嚆矢にあたり、半自伝的な作品の系譜のなかで、清太を野坂と同一視する読みの枠組みが醸成されてきたといえるだろう。<sup>(1)</sup>

清水節治は、野坂自身が「あわれな戦災孤児」という作家イメージを流布させたとはいえ、後に自らその枠組みに異議を申し立ててしまうと指摘している。<sup>(2)</sup>たとえば野坂はある自伝で、「ぼくは自分のついた嘘、つまり、自分をあわれな戦災孤児に仕立て、妹思いの兄の如く描いた嘘が、一種の重荷として、はっきりのしかかって来た」と心情を吐露した。<sup>(3)</sup>また、後に別の自伝において「火垂るの墓」をとりあげ、「なんとなく、ぼくの体験を下敷きにしている、いや大本のところで、私小説に違いないのだが」と前置きしつつ、小説と現実の違いを述べている。<sup>(4)</sup>

しかし、本稿で問題としたいのは、「火垂るの墓」における私小説的側面ではなく、この小説作品において虚構がどのように構築されているかである。たとえば清太は本作品の清太と節子が送る「螢が飛び交い蛙が鳴き交わす自然の中の生活に、

作者はおそらく人工的なものを越えたユートピアを見ていた」ととらえ、二人が暮らす壕を「作者自身にとつての解放区でもあった」と主張する。<sup>(5)</sup>これも一つの見方であるが、私小説的側面とはやや異なるものの、作者を強い参照枠とするものであることに変わりはない。

そこで本稿では、「火垂るの墓」における地名などの地域を示す表象を実際の地図と引き比べつつ読み解くことで、半自伝小説とは異なる、この作品の新たな解釈の可能性を探りたい。このとき、作者の現実の動きとは異なる登場人物などの動き、すなわち作品の虚構的側面に注目してゆくことになる。なお、本稿では参照の便宜を考え、現行の文庫本（二〇〇三年改版、新潮社）を用いることとする。

### 一 御影のトポロジー

まず「火垂るの墓」の時系列上最初の大きな出来事である空襲を取り上げよう。清太の自宅は「御影の浜に近い」（二二頁）。以下「火垂るの墓」からの引用は頁のみを付す）とされ、その町名は「上西、上中、一里塚」（一八頁）のいずれかである。これは阪神電車の御影駅近辺を指す。<sup>(6)</sup>

作中清太が節子を背負ってたどった避難路は以下のようなものである。まず「かねて手はずは、石屋川の堤防へ逃げるさだめだから阪神電車の高架に沿って東へ走った」（二三頁）が、混雑のため海（南）へ向かい、旧国道（現在の国道四三号線）を抜け、「見なれた灘五郷の黒い酒蔵」（一四頁）を経て海岸に至る。清太はそこか

横 濱 雄 二

ら西へ歩いて、石屋川の川床のくぼみに身をかくす。休憩をとった後、母のいると思われる「石屋川二本松のねき」(一五頁)を目指して、清太と節子は石屋川の堤防の上を進む。途上で屋根の骨組みだけを残して焼失した阪神石屋川駅を眺め、「国道をさらに山へ向かった右側に」(一七頁)ある二本松にたどり着くが、母親は見つからなかった。この後清太は誘導の声に促され御影国民学校へ向かうのだが、そこには重度の火傷を負った母が収容されており、翌日息を引き取る(二二頁)。

一方、野坂自身の被災経験はどのようなものであったか。二〇〇二年八月九月に放送されたNHK人間講座『終戦日記』を読む<sup>(7)</sup>のなかで、野坂は自身の経験に触れている。まず、当時の野坂の住居は「神戸市の東側、国鉄六甲道駅にほど近い、住宅地だった」とある。空襲の際、野坂は独りでそこから山(北)へ向かい、「空襲が終るまでそこを動かず、というよりも腰が抜け、歩けない、ただじっとしていた<sup>(8)</sup>」という。その後、かねて打ち合わせていた「石屋川堤防の大きな松の木を目指した<sup>(9)</sup>」が、そこに家族の姿はなく、メガホンの声で移動した先の国民学校で、妹と大火傷を負った養母に再会する。なお養父は行方不明であった。

清太と野坂、両者それぞれの位置関係を確認しておこう。清太の家は石屋川の東側で国道二号線の南側、阪神御影駅近辺であるが、野坂の家は石屋川の西側で国道二号線の北側、現在のJR六甲道駅近辺である。いま、石屋川を縦軸(Y軸)、国道二号線を横軸(X軸)とすると、清太の家は第四象限、野坂の家は第二象限に存在することとなり、両者は点対称の関係にあるといえる。ちなみに石屋川と国道二号線の交点には御影公会堂があり、また、両者共通の待ち合わせ場所である二本松は、正確な位置は未詳であるものの、公会堂の対岸の付近にあった<sup>(10)</sup>。そうすると、両者に共通するこの二本松を、点対称の原点と見なしてよいだろう。さらに、野坂が山つまり北へ向かったのに対し、清太が海つまり南へ向かったことも、両者が点対称であることから説明できる。

また、両者はその移動の方角ばかりでなく、移動の経路でも対照的である。野坂が北へ直線的に避難したのに対し、清太は最初阪神電車に沿って東へ向かい、その後南に移動して海に出て、西に方向を転じ、石屋川を北上して二本松に至る。野坂の直線運動とは大きく異なり、清太は居宅から南の方へ大きな円弧を描いて避難し

ているとみることができる。(図1)。

ここから一定の見通しを得ることができよう。野坂自身は直線的に北上し、結果として生存することができたが、清太は円弧状に南へ移動し、最後には悲劇的な結末を迎えてしまう。つまり、直線的な、そして北上する軌跡は生へと繋がり、逆に円弧をなす、あるいは南下する運動は死に近づくということである。

さらにいえば、直線が危地からの脱出を示すとするならば、円環は危地への回帰と捉えることもできる。しかし、これを確認するためには、本作品の他の地域表象について、さらに考察を進める必要がある。

## 二 神戸の円弧

冒頭に描かれている通り、省線三宮駅構内浜側で清太は死を迎える(八一頁)が、死の表象はこの場所に至るゆるやかな円弧を形成している。まず、御影国民学校で身罷った母の亡骸は、一王山下で茶毘に付される(二三頁)。本文では触れられていないが、この一王山には十善寺が置かれ、付近は墓地となっている。また、後に明かされるが、母の墓そのものは、布引近くの春日野墓地にある(三四頁)。そしてその布引こそ、清太が茶毘に付され、無縁仏として納骨された寺のある場所なのである(四二頁)。このように、御影国民学校から一王山、春日野墓地、布引、三宮と、死の表象と結びついた地名は神戸の中心地に向けて緩やかな円弧を形成している(図2)。

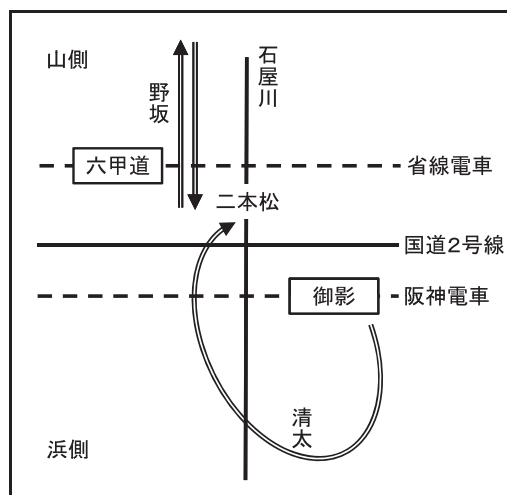


図1 御影・六甲道付近概略

いだろうか。

ひとつには、野坂自身の体験が混入したと見ることもできようが、野坂の体験とは異なる虚構としての位相を考察するという本稿の立場では、別の見方をせざるを得ない。それを示す前に、テキストの語り手について考えておこう。テキストは最初に清太の死を描写し、その後、御影の空襲から時系列を辿り直してゆく（一二頁）。また、独特な饒舌の文体ながら、地の文の各所に清太の心情が描出されている。つまり語り手は清太に内的焦点化しつつ、時系列では事後的な位置にいる。これは死後の清太の位置にほぼ等しいといえる。<sup>山</sup>

この簡単な考察を踏まえると、石屋川を含め四つの川を渡るという記述は、石屋川より西の三宮にいる死後の清太の位置が、テキストに反映したものと見ることが

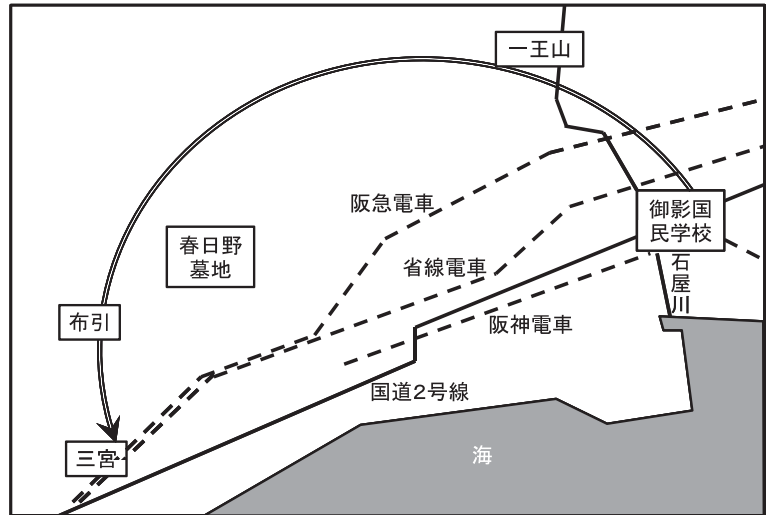


図2 御影・神戸付近

さて、清太は被災した御影から西宮市満池谷の寄寓先に疎開する。地理的關係で言えば、御影町は現在の神戸市東灘区の一部であり、そこから東に芦屋市を通過して西宮市に至ることになる。本文には「大八車を借り石屋、住吉、芦屋、夙川と四つの川をわたって一日がかりで運び」（二二三―二四頁）とあるのだが、先の図1にも示したとおり、清太の家は石屋川より東にあり、そこからさらに東に向かう際に石屋川を通過することはありえない。このことをどう捉えるかと

できるのではないだろうか。ここにはまた、テキストでは「四つ」とあり読みは異なるにせよ、「四」と「死」が連想されやすいものであることも併せて指摘しておきたい。空襲を生きのびた清太が四つの川を越えた向こうに赴くことは、実体験の位相で野坂の体験が重なったものであると同時に、虚構の位相で死後の清太が重なったものと考えられる。

とはいえ、神戸の市街地が全て死の表象に満たされているものではない。清太は海軍将校の父に手紙を出した帰りに、神戸銀行六甲支店、住友銀行元町支店で預金を確認する（二四―二五頁）。これは母の死を受けての行為であり、また父からの返信がないことをあわせると父母の死を匂わせるものでもあるが、死の表象の円弧を離れ、生の営みに繋がる要素でもある。

これらを考え合わせると、以下のようなになる。まず、御影から三宮まで、死の表象が円弧をなして連なっている。さらに語り手は、三宮で斃れた死後の清太である。これらは御影から西宮へ脱出する清太に対して、弱いながらも「四／死」の川を渡るという形で、影を落としているといえる。このようにして、御影から南西側の神戸は、野坂の実体験とは異なる母と清太の死の表象を円弧状に配置することで、死の空間を構築しているのである。

### 三 夙川沿いの往復

さて、焼け出された清太はかねてからの約束に基づき、西宮市満池谷の未亡人宅に身を寄せる。このとき地域表象の面で注目すべきは、節子の汗疹をきっかけに海に赴くことである。本文の記述を確認しよう。満池谷から「小川に沿って浜へむかうと、一直線に走るアスファルト道路」（二六頁）を通り、「右へ曲ると夙川の堤防に出て、その途中に「パボニー」という喫茶店、サッカリンで味つけた寒天を売っていたから買い喰いし」（同）たのちに至った「夙川の堤防はすべて菜園になっていて」（二七頁）、堤防を進むと、「海岸には、海水を一升瓶で汲む子供や老婆の姿が」（同）あった。

海水浴のあと、清太はある母子の再会を目撃する。「警報が出たから戻りかける

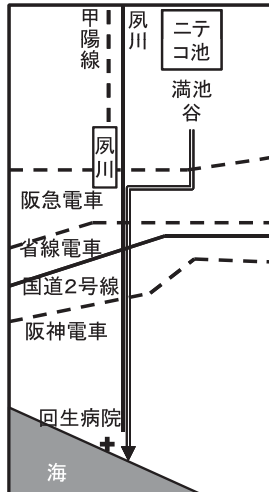


図3 夙川(概略図)

と、回生病院の入口でふいに「いや、お母さん」と若い女の声がひびき、みると信玄袋かついだ中年の女に看護婦が抱きついていて、田舎から母親が出てきたものらしい(二八頁)と本文にあり、とりたてて清太にとって関わりのある人物ではないのだが、「うらやましさと、看護婦の表情きれいなやと半々にながめ」(同)るのである。

この邂逅は清太自身の母ではないものの、母との再会を印象づけている。ところで、空襲で重度の火傷を負った野坂自身の母は、この回生病院に入院していた。野坂は以下のように述懐する。

数日後、傷ついた養母を、夙川の河口近くにある病院へ運んだ。病院に入院させたところで、治療のための薬があるわけでもない。煮炊きもできないので、食べ物毎食、届けなければならぬ。入院させる利点など何一つなかったが、子供心に入院と決めていた。ぼくと妹は、西宮、甲山に近い養父の知人の家に世話になることになった。毎日二食、母の食事を作ってもらい、山から海まで夙川沿い、約六キロを、朝夕運んだ。弁当箱へ入れた野草沢山の雑炊。(中略)この後、負傷した養母を、大阪郊外の守口に住む祖母に預け、ぼくと妹とは、知人を頼り、福井県の春江へと疎開する。<sup>12)</sup>

野坂自身の体験と一致する夙川沿いの往復運動を、目的地のほかに重要な経路地を持つことに着目して、直線と円弧の中間をなす、屈曲した直線運動ととらえよう(図3)。図3の屈折部分、阪急夙川駅近くに喫茶「パボニー」があった。<sup>13)</sup>この往復は、清太と節子にとって死ともなわなない運動である。野坂が夙川沿いに朝夕往復したものとおそらくは同じ経路をたどって、清太と節子も往復する。清太は母を喪ったため、野坂と異なり回生病院を

目的地とはしないものの、病院そのものは他人ながら母の生存が確認される場として経由する。このように、夙川沿いの往復運動は野坂の体験に近いものであり、生存に至る経路の存在を示しているように見える。しかしながら、野坂が自らの家族の一員としての母と会うのに対し、清太は自らのものではない母と邂逅するにとどめられている。これは野坂と異なり、清太が生を自分のものとして保つことができないということを示しているのではないだろうか。

#### 四 西国街道の彷徨／方向

この後、寄寓先との軋轢の末、清太は節子を連れ貯水池の横穴壕に移り住むこととなる(三二頁)。<sup>14)</sup>本文中には明示されていないが、満池谷の北側に隣接するニテコ池がそれである。<sup>15)</sup>野坂自身もまた、祖母、妹、母とともに寄寓先から離れて横穴壕に暮らした。

移住の後、困窮した清太は畑泥棒を働き農夫に発見されるが、警察官は説諭のみで清太を解放した(三六頁)。さらに清太は西宮中心部の空襲の際、住人の避難した満池谷で空き巣をし、その盗品で物々交換を試みるが、「さすがに近所ははばかれたから、水田のいたるところ爆弾孔のある西宮北口、仁川まで探し求めて、せいぜいトマト枝豆さやいんげん」が手に入るのみであった(三七頁)。

本文にある西宮北口は阪急神戸線と今津線の乗換駅で、清太はここから今津線に沿って北に門戸厄神、甲東園をへて宝塚市の仁川に至ったと考えられる。ニテコ池を出発地にこれらをなだらかに結ぶと、西国街道(国道一七一号線)を弦にする円弧を描いていると捉えうる(図4)。西国街道は神戸から西宮を経て北東に京都へ至っており、京都のさらに北東には、野坂の疎開先の福井県がある。野坂がニテコ池から北東方向に直線的に脱出したのに対し、清太は西国街道を跨いだ円弧を描いて池へと回帰している。ここでもまた、円弧と直線の対比が見られるのである。

本文はこの直後から、節子の衰弱と死に焦点を合わせる。夙川駅前の医者を訪ねるが、医者は滋養が必要と言わばかりで薬も出さない。清太は節子を抱えて帰路立ち寄った夙川の堤防で、氷を鋸引きした削りカスを拾い与えるのだった(三七—三



八頁）。

食物確保の困難さが鋭く描かれているこの叙述から、ニテコ池から夙川駅前、堤防を経て池に戻るといふ運動を読み取ることができる。図4で示したようにニテコ池と満池谷は夙川東岸を南北に広がっているため、清太の立ち寄った堤防は特定できないが、夙川沿いに往復したと見るならば、この清太の移動を第三節で挙げた屈曲した直線運動と見なすこともできよう。しかし、既に北東方向への脱出を試みずに円弧を描いて回帰してしまった清太は、この往復を生に繋げることができないのである。

## 五 螢 と 墓

清太は衰弱死した節子を茶毘に付そうとするが、「市役所へ頼むと、火葬場は満員で」（四〇頁）受け入れられず、木炭の特配を受けて、「満池谷見下す丘に穴を掘り、行李に節子をおさめて」、自らの手で火葬する（四一頁）。そして夜更けに火が

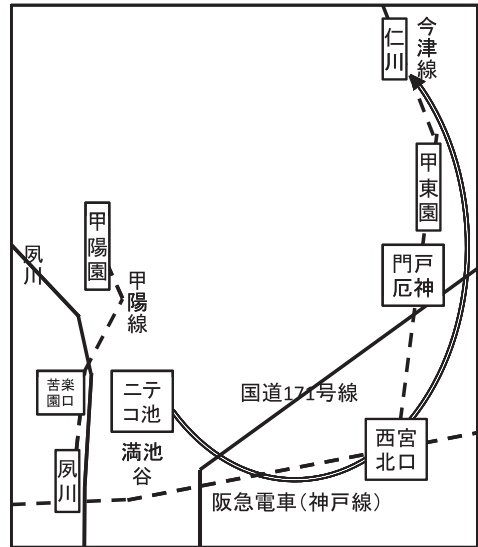


図4 西宮の円弧



地図1 ニテコ池・満池谷墓地

清太は、壕に戻らず神戸市街へ赴き、本文冒頭にあるように、三宮駅構内で死を迎えることとなる。

いま地域表象の面で注目すべきは、「火垂るの墓」という題名と強く呼応するこの節子の死と葬儀において、さりげなく触れられた「火葬場」の位置である。地図1にあるように、ニテコ池の北方には広大な満池谷墓地が広がっている。西宮市図書館長などを歴任した南野武衛によると、この墓地は一九一二年、この地がまだ武庫郡大社村に属していた頃に設置された火葬場に始まるという<sup>16)</sup>。満池谷墓地が本格的に開発されたのは昭和に入ってからで、西宮各所の墓地を整理して一九二九年九月までに一万あまりの墓碑を集約、その後一九三三年、三十七年と地域を拡張していった<sup>17)</sup>。また、南野は節子の火葬された丘を、現在の大社中学校付近と想定している<sup>18)</sup>。地図1では、満池谷墓地の西隣に「神原」と地名表記があり、その西隣に大社中学校（やや大きい「文」、南西に隣接して神原小学校（小さい「文」）がある。

しかしながら、「火垂るの墓」の本文は、この満池谷墓地を排除している。墓地についての言及がないばかりか、火葬場の位置も示されないままである。そして、

燃え尽きると、螢の姿が目につくようになる。

周囲にはおびただしい螢のむれ、だがもう清太は手にとることもせず、これやったら節子さびしいやろ、螢がついてるもんなあ、上ったり下ったりついと横に走ったり、もうじき螢もおらんようになるけど、螢と一緒に天国へいき。（四一―四二頁）

この後節子の遺骨を拾い集めた

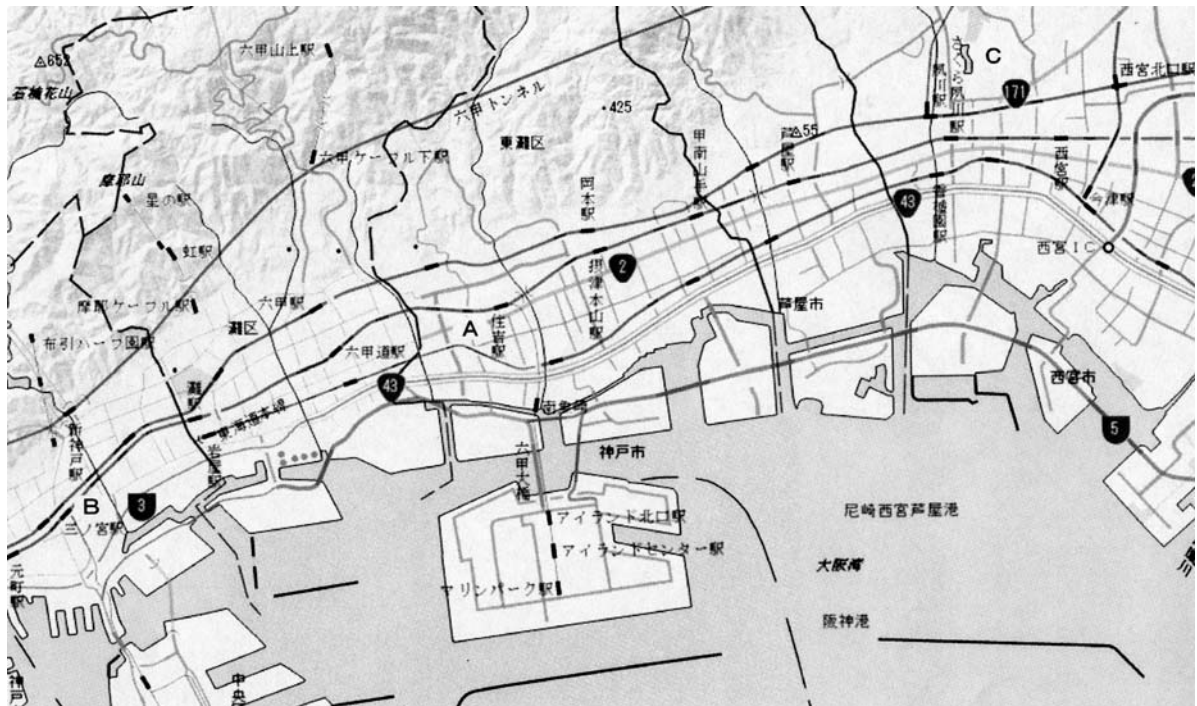
本文から排除された満池谷墓地から、節子もまた排除されているのである。火葬を断られた節子が大社中学付近で荼毘に付されたことは、ニテコ池を發して北へ向かう直線運動が遮られ、そのために西へ曲げられたことを示している。またしても北への移動は途絶し、西への移動へと置き換えられる。さらにこの運動は、これまで繰り返されてきた円弧状のそれと同じく、南西方向へ伸びてゆく。つまり、節子の遺骨を拾った清太は、その丘から南西方向の神戸市街へと回帰し、そして無縁仏として布引の墓地へ収められるのである。

「火垂るの墓」全体を見渡すと、清太は空襲の後に母が茶毘に付された一王山をはじめ、春日野、布引と三つの墓所をめぐったことになるが、しかし、清太の墓地をめぐる運動はこれにとどまるものではない。本文には触れられていないが、地図1を見ると、神戸から避難した寄寓先である満池谷（地図1の「満池谷町」）の北隣に横穴壕のあるニテコ池があり、その北隣に墓地がある。つまり、満池谷墓地は、本文では隠された第四の墓所なのである。そして、これらの位置関係を踏まえると、寄寓先から横穴壕への移動そのものもまた、墓地へと近づく運動であることがわかる。このように見るとき、西宮は生への可能性をほのかに示しつつも、やがて死へと囚われてゆく空間として構築されていることになる。そして最後の清太の南西方向への移動は、西宮の死の空間の極点をなす節子の「火垂るの墓」と、本文冒頭に描かれた清太自身の死の空間たる省線三宮駅構内という、二つの墓所を結びつけるものである。

先に引用した節子の火葬における螢の乱舞はたしかに目を惹き、「火垂るの墓」を「螢」の小説たらしめている。しかしながら、清太の運動に着目すると、この作品は、題名に含まれるもう一つの名詞、「墓」をめぐる小説としてもとらえることができるのである。

お  
わ  
り  
に

これまで述べてきたように、「火垂るの墓」を地域表象と関連づけながら読み進めると、そこには野坂自身とは大きく異なる、清太の死へ向かう運動が描かれている。



地図2 「火垂るの墓」関係全図（神戸～西宮）

ることが見て取れる。そのひとつは、北東方向への移動が生に、南西方向への移動が死に繋がることであり、もう一つは直線的な運動が生へ至るものであるのに対し、円弧をなす運動あるいは軌跡は死と結びつくことである。さらにいえば、重要な三箇所、すなわち御影、三宮、ニテコ池が死と墓所によって結びつけられているということもある（順に地図2のA、B、C）。

このテキストは冒頭に清太の死が描かれ、その後被災から時系列を追ってもう一度清太の死へと回帰する。この語りの円環構造は、地図で読み解いた登場人物の死と結びつく運動と一致する一方、作者本人の実体験とは乖離しているのである。

従来、私小説的な枠組みのもとで探求されてきた「火垂るの墓」について、本稿では地域表象を手がかりに、登場人物の運動を構造化して作者のそれと対比することで、作品の虚構としての位相をとりだした。虚構の登場人物は、作者の実体験とほぼ同じ地域をほぼ同様に移動しているように見えるものの、実のところ、実体験と鋭く対立しているのである。このように地域表象を中心的に論ずることによって、作品の新たな可能性を切り開くことができるのではないだろうか。

#### 附記

一、本稿は甲南女子大学にて二〇一二年九月一日に開催された第一回地域コンテンツ研究会における研究発表「野坂昭如『火垂るの墓』の虚構と地域表象」に基づいている。当日ご参加の方々、筆者にご助言下さった皆様に厚く感謝申し上げます。

一、「火垂るの墓」を歩く会の正岡茂明氏、尼崎市立地域研究史料館館長の辻川敦氏には、貴重なご教示をいただいた。ここに厚く感謝申し上げます。

一、図1—4は筆者が作成した。図1、3は位置関係を示す概略図であり、図2、4は地形図をもとに作成した略図である。

一、地図1については、国土地理院の「電子国土webnext」（地図画像二万五千分の1）を利用した（<http://portal.cyberjapan.jp/site/mapuse/index.html?lat=34.751553&lon=135.335871&z=16&did=DIBMM>）。

一、地図2については、国土地理院の「電子国土webnext」（地図画像二〇万分の1）を利用した（<http://portal.cyberjapan.jp/site/mapuse/index.html?lat=34.715653&lon=135.301301&z=13&did=BAFD200KG>）。記号A—Cは筆者による。

#### 注

- (1) 一例として文庫版収載の尾崎秀樹「解説」（野坂昭如『アメリカカひじき・火垂るの墓』新潮社、一九七二年所収）がある。
- (2) 清水節治「野坂昭如と自伝小説——『戦災孤児の神話』再々説」『日本文学誌要』第六五号、二〇〇二年
- (3) 野坂「野坂昭如 アドリブ自叙伝」日本図書センター、一九九四年（初出『現代』一九七三年一一二月号、単行本、筑摩書房、一九八〇年）、一八八頁
- (4) 野坂「わが桎梏の碑」光文社、一九九二年、一二頁
- (5) 清水「戦災孤児の神話」教育出版センター、一九九五年、二六頁
- (6) 本稿では鉄道路線について正式名称ではなく、「火垂るの墓」の本文にあわせ、「阪神電車」などの通称を用いた。なお現在のJR線については、当時の通称「省線電車」を用いた。
- (7) 野坂「終戦日記」を読む』朝日新聞出版、二〇一〇年（初出単行本、日本放送出版協会、二〇〇五年）、七三頁
- (8) 同、七九頁
- (9) 同、八〇—八一頁
- (10) 「火垂るの墓」を歩く会の正岡茂明氏のご教示による。同会は毎年夏に「火垂るの墓」にゆかりの深い場所を散策するツアーを実施している。
- (11) 高畑勲によるアニメーション化作品（一九八八年）においては、小説では登場しない清太と節子の幽霊と思われる存在が登場し、生きている二人の行動を見守るという構成がとられている。これは本文に述べたテキストの語り手の位置を反映させたものと考えうる。
- (12) 野坂「終戦日記」を読む』、八一—八二頁
- (13) 正確な位置については、正岡茂明氏のご教示による。なお、店名は「パボーニ」（Pavoni）であった。阪神大震災に伴い西宮での営業は終え、後継の店舗が大阪に開かれている。
- (14) 先に言及したアニメーション化作品では池東岸に横穴壕が設定されている旨、尼崎市立地域研究史料館館長の辻川敦氏よりご教示いただいた。
- (15) 野坂「わが桎梏の碑」、八六—八八頁
- (16) 南野武衛「西宮文学風土記」上巻、神戸新聞出版センター、一九八二年、一一五頁
- (17) 武藤誠・有坂隆道編『西宮市史』第三巻、西宮市役所、一九六七年、三五九—三六〇頁。また、一九四二年の地図を見る限り、ニテコ池と墓地の領域は現在と違いはないようである（『西宮市土地寶典』大日本帝国市町村地図刊行会、一九四二年）。
- (18) 南野、前掲、一二三頁

## Geographical Representations in Akiyuki Nosaka's “Grave of the Fireflies (Hotaru no Haka)”

YOKOHAMA Yuji

**Abstract** : The aim of this paper is to suggest a new way of understanding Akiyuki Nosaka's short story “Grave of the Fireflies (Hotaru no Haka)”, which has been read as an autobiographical work although it contains many fictions. A good suggestion to understanding its strategy is the geographical representations and their structures in this text, which make a keen contrast with Nosaka's own life.

There is the chain of death around Sannomiya in Kobe City. The ashes of the protagonist, Seita, are placed in a temple in Nunobiki, near Sannomiya. His mother's ashes are also placed in Kasugano cemetery near Sannomiya. Setsuko, Seita's little sister, starves to death in Niteko-ike, Nishinomiya, next to Manchidani cemetery, to which the text never refers. In this way, the text concerns both the fireflies and the graves as the title proclaims. It describes the floating fireflies in the cremation of Setsuko, which cannot be the souls of the dead in the air raids. And the characters wander about where the representation of the graves are.

Seita leaves Setsuko's grave with fireflies near Niteko-ike and goes Southeast to Sannomiya, starving to death. Although Nosaka found his refuge with his little sister in Harue, Fukui, which is located to the Northeast of Kobe. The linear motion to the Southeast leads to death, in contrast to the Northeast which leads to survival.

These two geographical structures correspond to the structure of the text which starts from and ends with the death of Seita. Thus the circle that this text traces closes the northeastern gate to survival.

**要旨** : 野坂昭如の短編「火垂るの墓」は多くの虚構を含んでいるが、自伝的に読まれてきた。本稿では、テキストに見られる地域表象を手がかりとしつつ野坂自身の動きとも考え合わせ、「火垂るの墓」について再考する。

三宮をめぐる濃厚な死の連鎖がある。主人公清太は三宮近くの布引の寺に納骨され、清太の母も同じく春日野墓地に葬られた。清太の妹節子は西宮のニテコ池で餓死する。これはテキストで描かれていないが、満池谷墓地に隣接している。このように、テキストは「蛍」をめぐると同様に、「墓」をめぐる円環をなしている。

清太はニテコ池そばの節子の蛍の墓を離れ、南西の三宮に赴き餓死するが、野坂自身は妹とともに神戸の北東方向、福井県春江に疎開する。南西への直線運動は死に至り、逆に北東への運動は生へと繋がる。

これら二つの地理的構造は、清太の死に始まり死に終わるこのテキスト自身の構造と対応する。つまり、このテキストの描く円環は、生に繋がる北東への門を閉ざしているのである。